

日本民衆の西洋文明受容と朝鮮・中国認識
——娯楽に託された自己像から読み解く——

青木 然

本稿は、19世紀後半の日本における民衆の朝鮮・中国認識を検討する。先行研究では、民衆の西洋文明への反発が反乱の弾圧によって収束した結果、民衆は自らの劣位性を文明化の遅れた朝鮮・中国に転嫁して蔑視するようになったと説明してきた。この理解は、西洋文明への反発を内面的に解決できていない民衆が、西洋文明の尺度で他者を蔑視する矛盾を看過している。そこで本稿は、講談を中心とした娯楽から、反乱には表出しないレベルでの西洋文明の受け止め方や、朝鮮・中国という表象に託された願望を抽出することで、この矛盾が民衆意識のなかでどう処理されていたかを解明しようとした。実証に際しては、民衆娯楽の精神性や、対娯楽政策・トレンド・社会状況の変遷を押さえることで、語りの特徴を浮き彫りにし、朝鮮・中国に与えられた形容を、当時の民衆の受け取り方に即して読み解くよう努めた。

具体的には、当時の娯楽を二つの語りのせめぎ合いとして把握した。ひとつは、江戸後期から都市で育まれてきた風刺的な語りで、もうひとつは、地方出身の都市民増加を背景に1880年代半ばに登場した主張的な語りである。1880年代前半の壬午軍乱・清仏戦争に関する作品では、風刺的語りが各国の抵抗分子の「頑固さ」に捻れた共感を示し、日本民衆の浅薄な文明国民意識を嘲笑した。日清戦争の作品では、主張的語りが中国蔑視を横溢させたが、風刺的語りはそれを相対化し、朝鮮や中国に共感を示す物語を提示した。民衆は、この二つの語りが交錯する場で、朝鮮・中国を、抑圧委譲の対象としてだけでなく、文明的な行動規範に苦しさを覚えたときの逃避先としても認識することができた。しかし、文明的自己像の虚構性を披瀝することは困難となり、朝鮮・中国への共感は禁忌として表象された。こうした自己否定を巧妙に免れる西洋文明受容のあり方は、帝国に生きる民衆のある種の「特権」だったといえる。